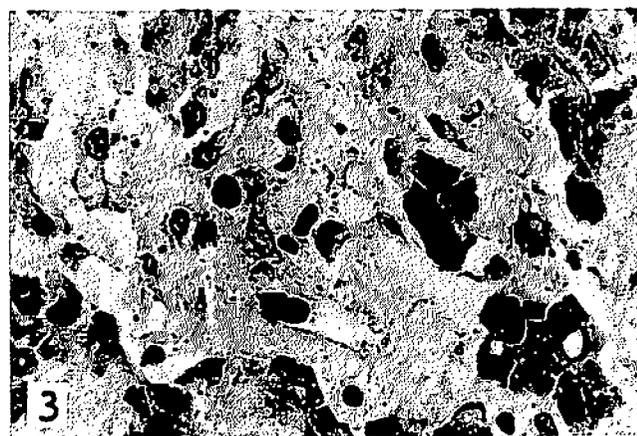
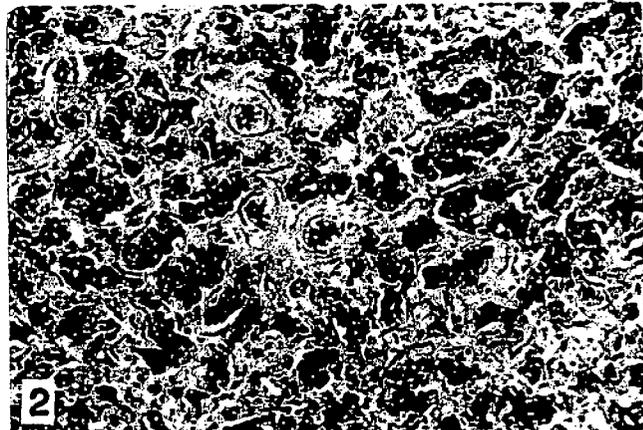
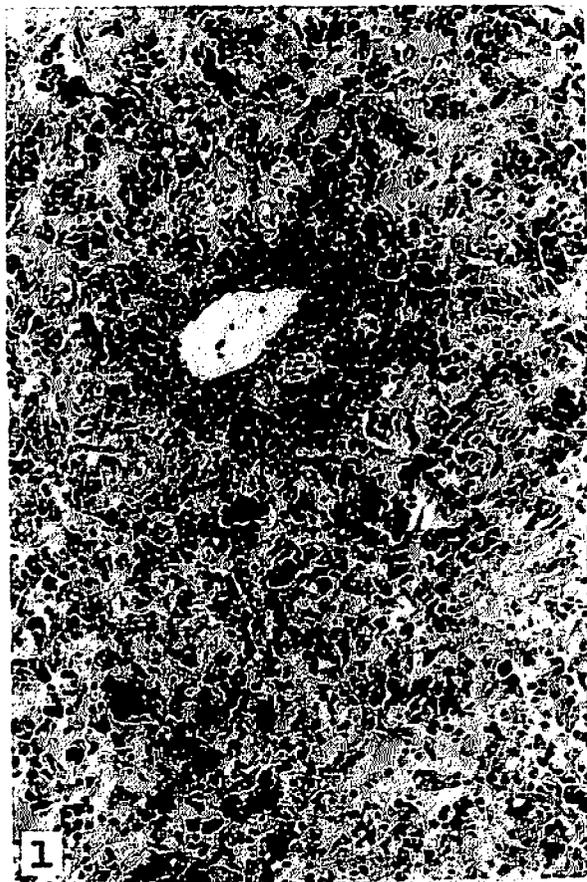


# 鶏の肝臓

日本生物科学研究所第4部出題

第20回獣医病理学研修会標本No.323



某養鶏場より病性鑑定を依頼された120日齢(A群)および90日齢(B群)の各5羽の鶏に、慢性肝病変を持つものが含まれていた。本例はA群の1例である。その養鶏場の鶏には70日齢頃より元気消失、食欲不振、発育遅延および貧血が認められ、約100日齢の剖検例には肝臓の出血が見られた。病性鑑定例には鼻汁漏出、喘鳴等の呼吸器症状、高度の消瘦と貧血を認めた。剖検により高度の気嚢炎を認め、病原的および病理組織学的検索によりマイコプラズマの感染を確認した。提出例ならびB群の1例では、肝臓は全葉一様に濃緑褐色調、腫大し、硬度と弾力性を著しく増していた。B群の1例では、壊死巣を伴っていた。

組織学的に肝臓は出血巣を多発し、所々にPAS陽性、アザン染色で背染し、PTAH染色で桃色を呈する硝子様物の析出があり、胆管の増生、門脈周囲に若干の偽好酸球の浸潤が見られた(図1, H&E, ×150)。増生した胆管の周囲ならびに個々の肝細胞あるいは肝細胞索を取り囲むように、細網線維あるいは膠原化した線維が増殖していた(図2, 渡銀, ×150)。肝細胞の萎縮は高度であり、変性壊死におちいるものも見られた。類洞に沿って

増殖した線維成分に著しい水腫性膨化があるため、H&E染色標本では一見、アミロイド沈着の存在を想わせた(図3, H&E, ×600)、コンゴレッド染色標本の光学および蛍光顕微鏡による観察ならびに電顕検索によってアミロイドは証明されなかった。

本例類似の肝病変に、人における瀰漫性間質性肝硬変がある。この場合には通常、肝臓の萎縮が著しくなく、また実質の結節性再生ないし結合織によって取りかこまれる偽小葉を欠くなどのため、それを真の肝硬変に含めるべきか否かについて議論がある。

家禽における肝硬変の発現は稀である(Nieberle und Cohrs)。Dougherty et al.(1963)はアヒルの慢性肝疾患54例を組織学的に検索し、瀰漫性ライネック型肝硬変2例および壊死後性肝硬変1例を認めている。これら両型のうち前者の組織像は、本例のそれに極めてよく類似する。従って本例に対しては鶏という動物種の特性を考慮して、敢えて瀰漫性肝硬変なる診断名を与えた。勿論、研修会の席上で討議があったように、本例の組織像に対しては肝線維症の診断も可能であることを付記しておく